

2025年12月25日(木)
中国新聞SELECT掲載

国連訓練調査研究所（ユニタール）による核軍縮・不拡散研修に参加するため、2025年2月、初めて広島を訪れた。この経験は外務・貿易省で外交官として働くことを選んだ私に初心を思い起こさせてくれた。小さな島国でも私たちの体験、痛みには意味があり、核兵器のない世界を希望することには重要な価値があるのだ、と。

本研修は、核軍縮を巡る議論で外交官が果たすべき役割について理解を深め、平和と安全保障に関する議論を推進させる技能を習得

被爆80年 リレー エッセー



マーシャル諸島共和国 外務・貿易省 多国間関係局次官補 テリ・エルボン 母国重ね 核軍縮を再認識

することにあった。特に核兵器の
人道的・環境的影響を強調し、被
爆者の実体験を共有する内容も含
まれていたのが印象に残る。

母国・マーシャル諸島共和国で
は、ビキニ環礁での水爆実験「ブ
ラボー」など核実験がこれまでに
67回実施された。核兵器の使用で
引き起こされた健康被害や苦しみ

を断ち切り、人としての公正な扱
いを求める「核の正義」を追い求
めている国でもある。

とはいえ、広島に到着した当初
は、今ほど深い結びつきを感じる
地になるとは思わなかった。だが
平和記念公園（広島市中区）を歩
くと、荘厳で美しさを超えた静かな
力と使命感が迫り、胸を打たれた。

被爆者の物語や傷跡は核兵器の破
壊的な影響として深い感銘をもた
らした。母国の核実験と相まって
核軍縮は単なる政策問題ではな
く、道義的責務だと強く認識した。

広島での経験から私はより効果
的に自国の立場を世界に届ける力
を身に付けることができた。母国
が核軍縮を目指す取り組みに積極
的に関わり続ける重要性や困難が
多い道のりを進み、平和と軍縮と
いう共通目標のため協働すること
が外交であることも再認識した。

私は広島から平和が単なる目標

ではなく、生き方だと学んだ。原
爆投下から80年、広島の人々に心
から感謝したい。皆さんの勇気と
平和への献身、体験を分かち合う
姿勢は、これからも多くの人々に
深い感動を与え続けるだろう。被
害を受けた者同士として、声を上
げ続け、二度と同じ苦しみが続
り返されない未来を共に築いてい
きたい。

「被爆80年リレーエッセー」
は今回で終わります。